

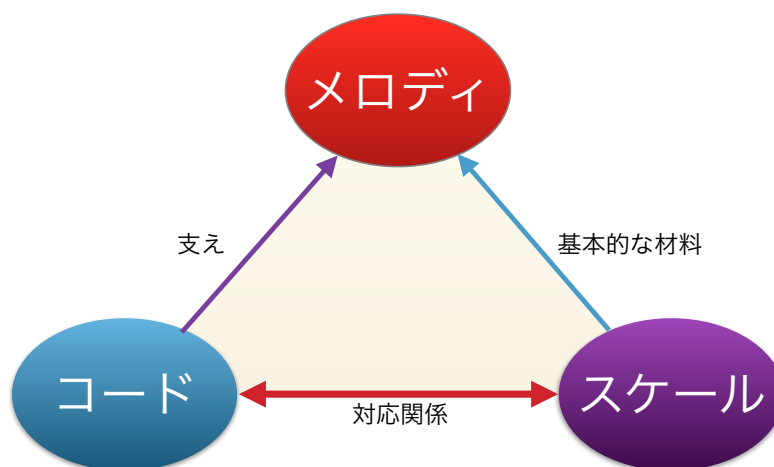
第11回 Blues system①

19世紀末アメリカディープサウス発祥のBluesはポピュラー音楽において極めて重要な要素を占めています。通常の音楽システムでは作り出すことができない独特な「渋さ」は時に「Blues feeling」と表現されポピュラー音楽にも積極的に用いられます。特に音楽理論的なその構成はMajor scale systemを基軸においたヨーロッパ西洋音楽と基本的システムを異にしており理解と習得のためにはその根本的概念を分けて考える必要があります。これからBluesを構成する様々な要素、Blues scaleやBlue noteの前に根本的概念を説明します。

Blues systemの基本概念

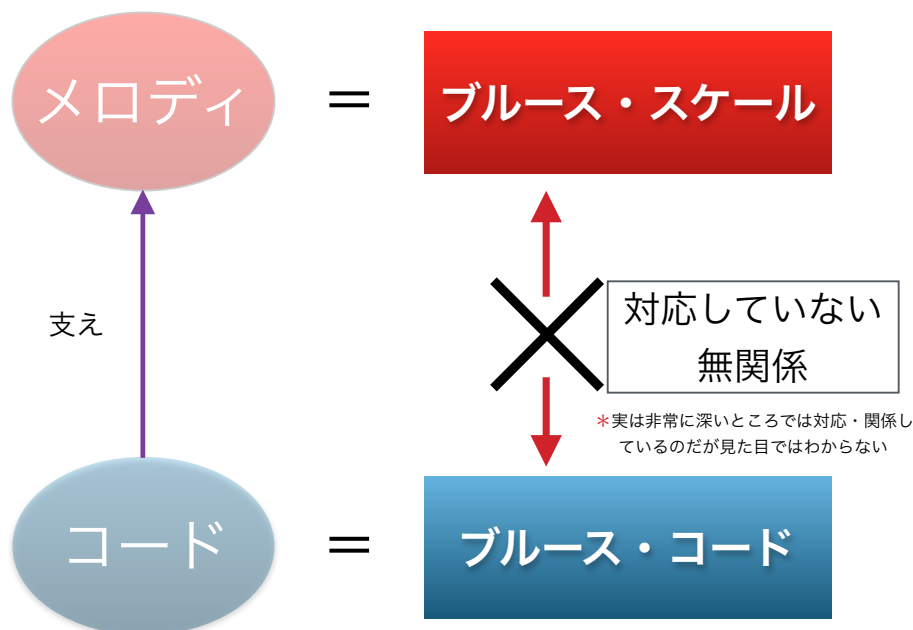
Blues systemは通常の音楽システムとその根本を異にします。まずは通常の音楽システムを再確認します。

通常の音楽システム



「メロディはコードに支えられる」ことを基本にしつつ、メロディとコードその両方はスケールに関連します。コードはスケールと対応関係にあり、メロディはスケールをその基本的材料としています。この関係を保つことが整合性のある作曲につながります。この関係が崩れたときにはサウンドが破綻する可能性が極めて高くなります。

Blues system



Bluesではメロディはほぼブルース・スケールを奏でることになります。そしてBluesで用いられるコードはブルース・コードが用いられメロディを支えます。しかし、このブルース・コードとブルース・スケールは対応関係になく一見全くの無関係に見えます。実際のところは音楽理論③で学ぶ「Approach harmonize」にて密接な関係を持つのですが、見た目の表面上では関係性を見出すことはまずできません。ここに通常の音楽システムを用いてBlues systemを解明しようとするとなぜ論理性に破綻することになります。Blues systemを理解するには根本的に頭を切り替える必要があります。

Blues systemのKey概念

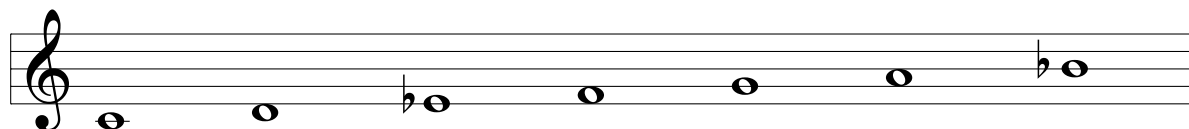
Bluesはそれ自体で独特の世界観を持ちますが、基本のKey概念はMajor scale systemに属します。Blues systemは通常の音楽システムと混在させることができ、あくまでもKeyはMajor scaleの「I」をTonicの基軸とします。

Bluesの要素

これからBlues systemの各要素を説明していきます。まずはブルースコードとブルース・スケールから説明します。

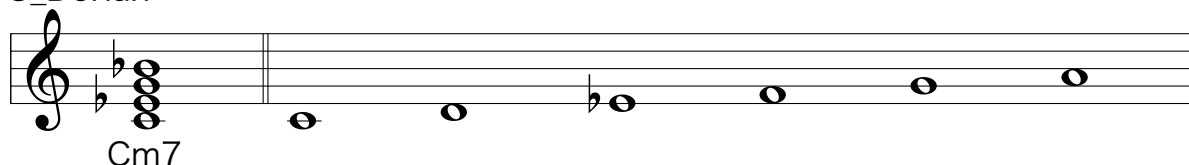
Blues scale

C_Blues scale



Major scaleの[III]と[VII]がフラットしたスケールです。一見するとDorianと同じに見えます。しかしながら対応するコードが異なります。

C_Dorian



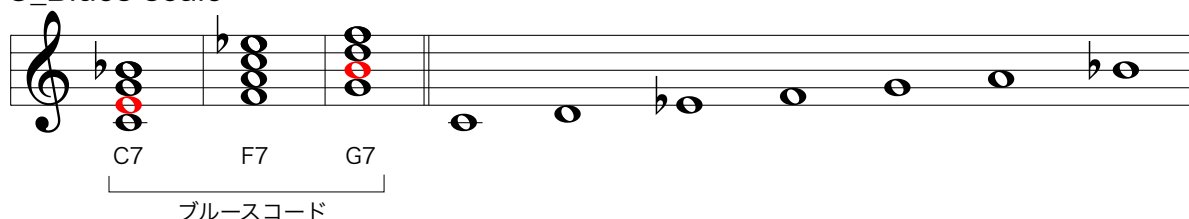
Dorianの対応コードはm7コードです。このコードとスケールは1：1対応です。

Blues scaleの場合はブルースコードが対応します。ブルースコードとはBlues状態(Blues systemが用いられている状態)で用いられる全てのコードを言います。

ブルースコード

ブルースコードはドミナントコードを中心に用いられます。特に最も基本的なコードは「I7」「IV7」「V7」です。そしてBlues scaleとブルースコードは1：1対応ではありません。

C_Blues scale



C7の「E」 G7の「B」はC_Blues scaleには存在しません。しかしながらサウンドは破綻しておらず、通常の音楽システムでは表現できないBlues独特のサウンド「Blues feeling」を醸し出しています。ここがBlues独特の構成「Blues system」の特徴です。

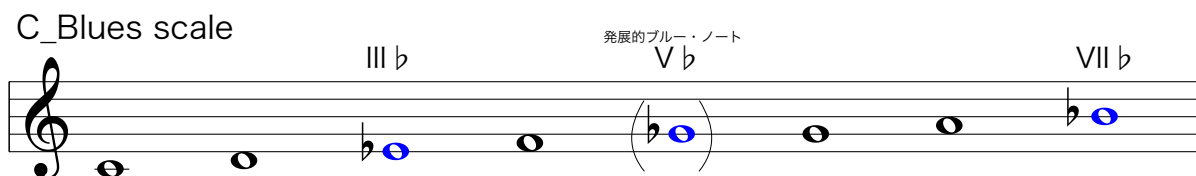
ブルースコードは「I7」「IV7」「V7」を基本としますが、ここから応用して全ドミナントコードが用いられます。さらに発展系ではあらゆるコードクオリティでのブルース進行が可能です。この時、コードのテンション付加は割りと自由に行われます。しかしながらBlues scaleとの整合性を考慮してテンション選択を行うことはもちろん論理的なサウンドを構築するには極めて有効になります。ここもサウンドコントロールの技法と言えるでしょう。

ブルースコードのまとめ

- ・基本形・・・「I7」「IV7」「V7」
- ・応用・・・全ドミナントコード(テンション任意)
- ・発展・・・全コードクオリティ任意選択可

Blue note

Blues feelingの最重要要素が「Blue note」です。Major scaleとの差異である「III ♭」と「VII ♭」さらに発展的Blue noteとして「V ♭」を加えることもあります。



Blue noteのキャラクター

- III ♭・・・最も強いBlue note
- VII ♭・・・弱いBlue note
- V ♭・・・発展的Blue note(最も「黒い」と表現される)

*発展的Blue noteの「V ♭」は単独の使用ではBlues feelingを醸し出しません。「III ♭」と「VII ♭」が恒常的に使われているBlues状態の中であって初めてBlue noteとしてのキャラクターが現れます。もし、通常の音楽システムにて単独使用すると「#11」のキャラクターに聞こえます。

Blue note pentatonic scale

Blue noteのキャラクターを全面に押し出すためにBlues scaleから「II」と「VI」を省略したスケールをBlue note pentatonic scaleと言います。だいたいにおいては発展的Blue noteの「V \flat 」も加えた形で用いられます。アドリブなどで最もよく使用されるスケールです。ここであらためて注意すべき点はこのスケールはメロディのキャラクター付けのために使われる「メロディ専用」スケールということです。コード対応のスケールではないことを再確認してください。

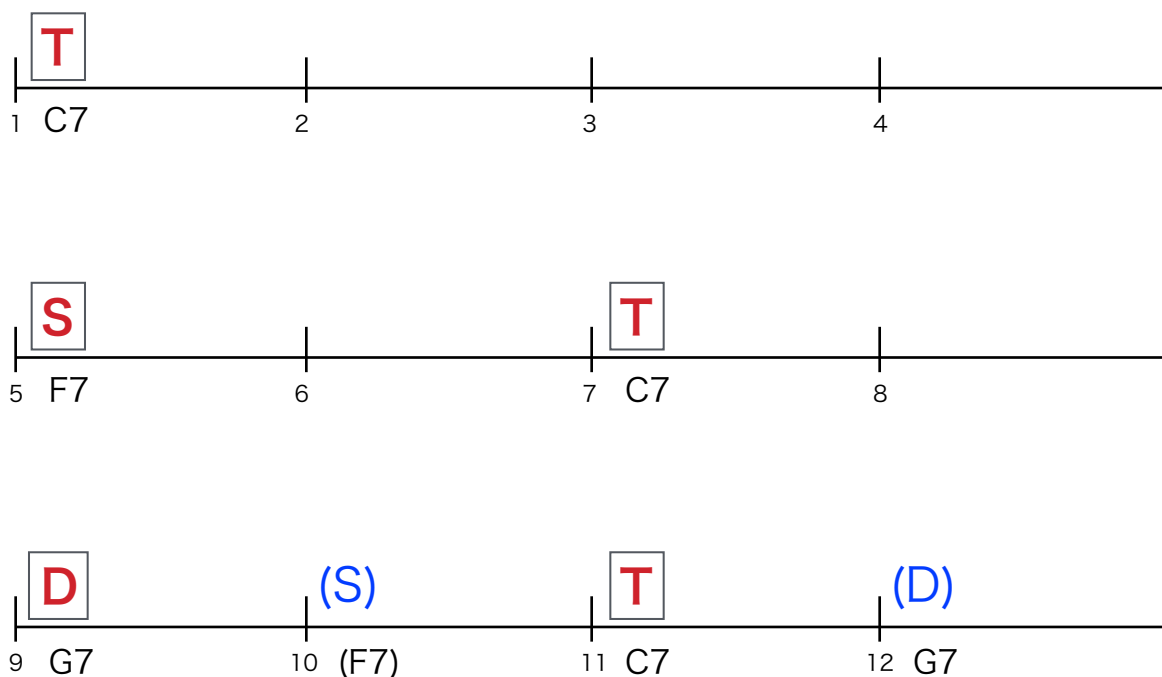
C_Blue note pentatonic scale



12-bar blues chord progression

Bluesで最もよく用いられる基本的コード進行です。一般的に「12小節Blues進行」と呼ばれます。

12-bar blues chord progression



ルール

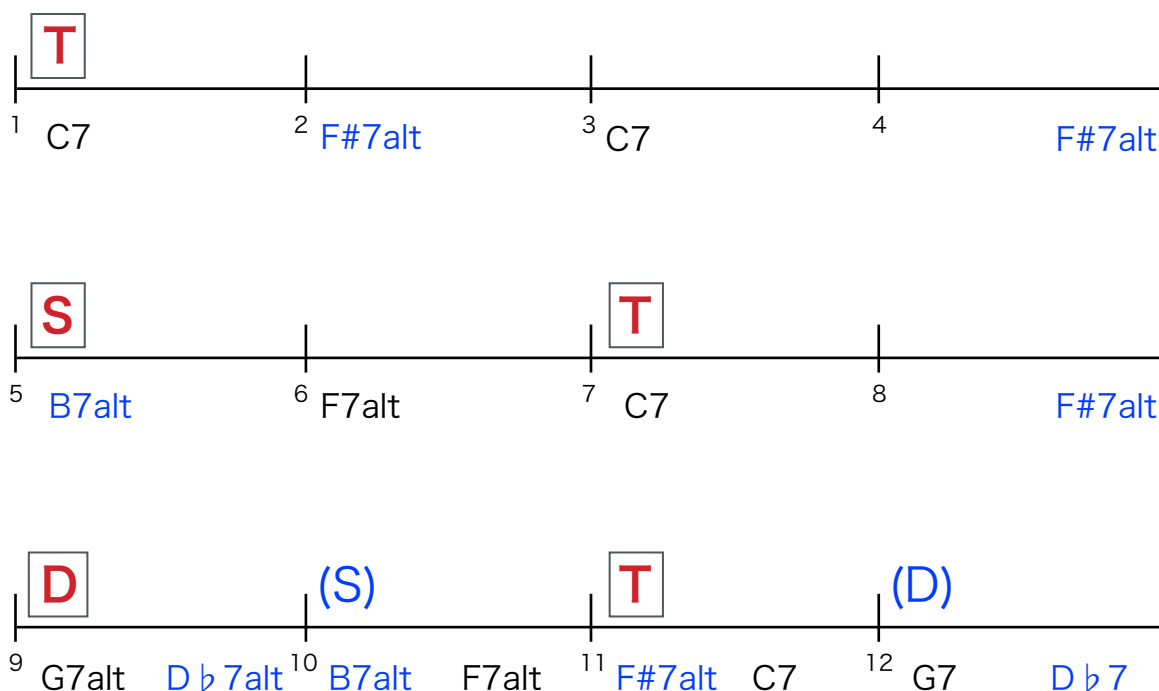
- 1小節目・・・Tonic
- 5小節目・・・Subdominant
- 7小節目・・・Tonic
- 9小節目・・・Dominant
- 11小節目・・・Tonic

*10小節目のSubdominantと12小節のDominantは定番として用いられることが多いが、この例に従わなくてもBlues feelingは保たれます

ここで決められているのはコードファンクションです。図では具体的に基本コードを配置しましたが、ファンクションがあればもちろん別のコードを当てても構いません。ここは非常に応用の効くところで「全コードルートの全コードファンクション」の技法を用いられれば極めて発展的で攻撃的なBluesサウンドを作ることできます。

まずは、代理コードを用いて変化させた例を見てみましょう。

12-bar blues chord progression



BluesのEtudeを載せます。重要なのはブルースコードが刻々と変化し、その構成音はBlues scaleにない音が使われているにも関わらず、メロディは頑なにBlue note pentatonic scaleを弾き続けている点に注目してください。

メロディはとても臨時記号が多いですがじっくり確認してください。そしてあらためて言いますが楽曲は「Key of C」です。

【11Ex-etude1】

The musical score for "11Ex-etude1" is written in G major (one sharp) and 4/4 time. It consists of three systems of music, each with a treble clef for the melody and a grand staff (treble and bass clefs) for the piano accompaniment.

- System 1 (Measures 1-4):** The melody begins with a triplet of eighth notes (G4, A4, B4) in the first measure. The piano accompaniment starts with a C7 chord (G4, B4, D5, F5) in the first measure, followed by a bass line of G4, F4, E4, D4.
- System 2 (Measures 5-8):** The melody continues with triplets. The piano accompaniment features F7 chords (C4, E4, G4, Bb4) in measures 5 and 7, and a C7 chord in measure 8.
- System 3 (Measures 9-12):** The melody is more intricate with multiple triplets. The piano accompaniment includes G7 chords (B3, D4, F4, Ab4) in measures 9 and 11, and F7 and C7 chords in measures 10 and 12.

[11Ex-etude2]

The musical score is divided into three systems, each with a piano (p) part and a guitar (g) part. The key signature is one sharp (F#).

- System 1:**
 - Piano part:** Features a triplet of eighth notes in the right hand and a steady eighth-note bass line in the left hand. Chords are C7, F#7(#9), C7, and F#7(#9 b13).
 - Guitar part:** Features a triplet of eighth notes in the right hand and a steady eighth-note bass line in the left hand.
- System 2:**
 - Piano part:** Features a triplet of eighth notes in the right hand and a steady eighth-note bass line in the left hand. Chords are B7(#9), F#7(#9 b13), C7(9 13), and F#7.
 - Guitar part:** Features a triplet of eighth notes in the right hand and a steady eighth-note bass line in the left hand.
- System 3:**
 - Piano part:** Features a triplet of eighth notes in the right hand and a steady eighth-note bass line in the left hand. Chords are G7(#9 b13), D7(#9 b13), B7(#9 b13), F#7(#9 b13), F#7(9 13), C7(9 13), G7(9 13), and D7(9 13).
 - Guitar part:** Features a triplet of eighth notes in the right hand and a steady eighth-note bass line in the left hand.